

## 地図から消される街

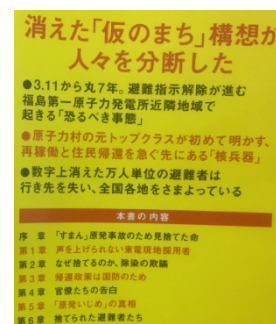
写真は新聞協会賞 3 度受賞の青木美希さんによる講談社現代新書。副題は 3. 11 後の「言ってはいけない真実」。福島原発事故でこんなにひどいことが起こっていたのを、あらためて痛感した。本書のなかで紹介したいことは多くあるが、はじめに一部と表紙カバー裏を紹介したい。

私は 7 年間、福島第一原子力発電所事故を追い続けている。この間、避難者に向けられる目は次々と変わった。当初は憐れみを向けられ、次に偏見、差別、そしていまや、最も恐ろしい「無関心」だ。話題を耳にすることが激減した。関心が薄れたところで、政府は支援を打ち切り、人々は苦しんでいる。私は、世の中の変化に翻弄される彼らに密着し、向き合ってきた。

原発事故直後、避難所となった各地の体育館に東北の人々が押し寄せた。都内の体育館では、孫と避難した 60 代の女性が「どうしたらいいの」と切羽詰まった表情で話した。力士がボランティアで炊き出しを行い、マッサージや相談コーナーが所狭しと並んだ。数ヶ月後、都内に避難した小学生は、同級生から「あなたは放射能を浴びているから中学生になるまでに死んじゃうんでしょ」と言われ、精神状態を崩した。1 年後、福島県の仮設住宅に住む女子高生は「もう県外の人とは結婚できない、と聞きました」と将来を案じた。

そしていま、避難者たちが「どうしてまだ避難しているの」という言葉を投げかけられている。闘病中の夫を支える女性もその一人だ。「帰りたくても地元の医療機関が閉鎖したまま。夫が治療を受けられなくなるのに」と嘆く。帰れば夫の命を縮めかねない。生きる選択肢が限られた彼らに、いったいどうしろというのか？ そもそも、彼らがどうなっているのかということすら、もはや世間の関心を失い、忘れられそうになっている……。

ネット社会の進展で、自分の好きな分野の話題や情報が大量かつ手軽に入手できるようになった。その反面、それ以外は見ないという風潮が広がり、そうした流れを助長している。結果として、不都合な事実を「なかったこと」として揉み消そうとしている国家権力の思惑通りになってしまった。これを許したのは、新聞やテレビ、各報道機関の敗北でもあると言われても仕方がない。我が身を含めて、あまりにも無力だったと猛省する。



表紙カバー裏から

街が消え、人が消え、この国にぽっかり空白ができています！

2017年の住宅支援打ち切りで起こったのは、避難者の名目の数の大幅減少だった。(略) 福島県では、復興公営住宅に入った人や住宅提供が打ち切られた人は避難者から除かれ、(略) 避難者数は全国で2017年3月から7月の4ヵ月間で約3万人減り、8万9751人とされた。こうして、「避難者」という存在は数字上、消えていく。(略) 当事者や大学教授らからは疑問の声が上がっている。(略) 旧知の官僚幹部に見解を尋ねた。「いつまでも甘えていると、人間がダメになる。パチンコや酒浸けになって何もいいことがない」健康影響が心配な人たちがいるんだと言うと、断言した。「将来、集団訴訟が起きて、国が負けたら、何か法制度をつくって救済するってことになるでしょう。水俣病と一緒にですよ」—「第6章」より

(2018年4月6日)